
モンスターハンター ~ New Face Diary ~

おうろら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター ～New Face Diary～

【Nコード】

N2310J

【作者名】

おつろら

【あらすじ】

狩人――

それは、大地や大空を駆ける巨龍に挑む者達。

或る者は名声を、
或る者は富を、
或る者は己が強さをひたすらに求め命を賭す

これは命を賭し、広き世界を駆ける数多の狩人たちの物語――

今からこの勇敢な狩人達の物語を聞かんとする者達よ。

諸君らは彼らと共に命を賭す覚悟はあるか――？

重苦しい感じで始まりましたけどこの物語は新人青年ハ
ンター成長記的な物です。

そこまで重苦しい作品にするつもりはありませんが狩猟パートはシ
リアスに、街パートはまったりと行きたいと思ってます。このサイ
トでは処女作で経験不足故に駄文乱文になる可能性が大いにありま
すがアドバースなどしたりして暖かい目で見守ってくれると嬉しい
です！

ではどうぞー

斑鳩飛翔（前書き）

最後までやりとおせるか心配になってきた…

斑鳩飛翔

少年は夢見る。

幼い頃からずっと読んでいる本に出てくる「ハンター」というものに。

子供の頃に読んでからというものの彼はハンターという職業に憧れていた。

「僕は絶対ハンターになるんだ!!」と両親に宣言して早十数年

丘の上には一人のハンターが立っていた。

というか一人のハンターもどきが不安げに立っていた。

「さーて…飛び出してきちゃったもののどうしたら良いんだろう…」

この不安げに丘の上に立つ青年は先日両親に真剣にハンターになりたいといったところ（泣かれて）拒否されたため持てるものを持って家出同然で飛び出てきたのである。

この青年の名前はイカル・オルファス

元来、この青年はそこまで活動的な子ではなかった。

名前であるイカルの由来は鳥の名前である斑鳩である。

斑鳩はとても綺麗で澄んだ声で鳴き、一年中どこでも飛んでいる。

斑鳩のように（特に後半）育ってほしいことからつけたという。

しかしまあ親からしたら名前に逆らって今まで外にあまり出ようとしなかったのに、こんな命にかかわる問題の時だけ外に飛び立たれたんだから堪ったもんじゃないだろう。

しかしイカルが家出の際に置いてきた手紙を見た両親は結局観念して追わずに夢を追いかけたのである。

まあこのイカル青年はそんなこと知る由もないのだが。

そんな彼は自分が住んでいた村からなけなしの金を使い馬車に乗り、そして歩いて街にいける距離になったら降りる、なんていう節約をして馬車から降りて歩いている。

彼がどうしたもんかと悩んでいる理由は別に道に迷っているとかそういうのではない。

念願の「ハンターの拠点」である「ドンドルマ」は目前に見えるのは良いものの

「此処に来たところで何処に住んで何したらいいんだろ……」
なんていう自責の念に苛まれていた。

強く生きる青年

すると諦めたかのように歩き出す。

彼は両親に大見得切って出てきたからには何か結果を残さねば帰れないことなど分かつてはいたからとりあえず街に行くしかなかったのである。

「それにしても馬車のお金ケチりすぎたかなあ……もうちょっと近くで降りしてもらえばよかったな……」

というのも彼が歩き出してから既に1時間以上が経過していた。辺りは閑散としていて本当に街の周辺なのかと不安になる。

「もうちょっとガヤガヤ騒がしいと思ってたんだけどな。」

「ギヤア！ギヤア！」

「そうそう、こんな風に何か聞こえるもん……だ……と……」

彼が声のした方向を見ると、

そこには青き狩人が獲物に狙いを定めていた――

斑鳩飛翔（後書き）

手厳しく指導していただきたいのですが打たれ弱い可能性があるのでソフトに厳しく教えてあげてください。
どっちなねん

若き狩人VS青き狩人（前書き）

ついにイカルの初陣

彼はこの戦いから生き延びることが出来るのだろうか…

若き狩人VS青き狩人

青き狩人「ランポス」

小型の鳥獣種ではあるが青き狩人の名は伊達ではなく集団戦闘を得意とする獰猛な生き物

一体では非力ではあるがそれは中級のハンターから見た話。
新米ハンター相手なら一体でも十分な戦闘能力が発揮できる。

イカルはその狩人と対峙している。
彼にとっては初陣でもある。

「っ——！！」

身構える、彼は腰につけているハンターナイフに手を掛けた。

彼は「ハンターになる」という心掛けのみで此処に来ているため必然的に戦闘訓練なんて大仰なものは受けていないのだ。

震える。

得物に掛けている手が震える。

青き狩人と見詰め合うこと数秒

青き狩人は若き狩人という獲物に猛然と走りだす

「き、きたっ！！」

昔、本で見た勇敢でカッコいいハンターの見様見真似でナイフを抜こつと試みる

が、

動かない。

体が動いてくれないのである。

恐怖

彼は初めて恐怖を目の当たりにする。

「う、あ、ああ——！！」

恐怖で声も出ない。

逃げたい。逃げたい。逃げたい逃げたい逃げたい！

しかし逃げようにも逃げられない。

体が動いてくれないのだ。

獰猛な狩人はそれに勘付いたのか更に向かってくる。

火事場の馬鹿力というものがあるがこれは体が動いてくれる、というのが前提である。

体が動かなければ話は別なのだ。

気づくと彼は強い衝撃と共に大地に仰向けになっていた。

しかし空は見えない。

青は見える、見えるがこれは空などという綺麗で清々しいものではない。

これはランポスが青い狩人たる由縁である鱗だ。

彼はランポスに組み倒されたのである。

彼はこの絶体絶命であるポジションから抜け出そうと試み、叫び、暴れる。

ふと、彼は気付く。

そう…彼は抜け出そうと「暴れた」のである。
それは

反撃の狼煙であり
身体が動くということでもある。

ランポスは喚く敗者を足元に勝利に酔っている。
狩人は獲物を殺さずに勝利の美酒に酔いしれている
まるで「狩人なんて百年早い」とでも言いたげに。

しかしこのランポス、狩人としてやってはいけない事をしでかしているのだ。

獲物は即座に殺す。
油断は死を意味する。

この青い狩人は相手が格好の餌であるが故に慢心が生まれてしまったのだ。

しかし、この若き狩人は諦めなかった。最期まで諦めなかった。
この差が勝敗を覆すということをこの青き愚かな狩人は知らない。

火事場の馬鹿力というものがあるがこれは体が動いてくれる、というのが前提である。

そう。今の彼の体は『動ける』
動けるのだ。

先とは違い彼は恐怖に屈せず抗い続けた結果このチャンスを得た。

彼は腰につけているナイフに手を掛け目の前にある愚か者の喉元に

若き狩人VS青き狩人（後書き）

まだちょっと実力で勝たせたくなかったのでランポスにアホしてもらいました。

しかしまだイカルはこの窮地を脱することが出来ません…

それはまた次回で！

では

勝利と憧憬（前書き）

渾身の一撃を放ったイカル。しかし悪夢は終わらない。

勝利と憧憬

吹きかかる血飛沫。

深く、深く急所に刺さった部分からは止め処なく命が流れ出る。

金切り声を上げ飛び退くランポス。

こちらに向け「何か」を叫んでいる。

（威嚇か……？）

驚くほど冷静に考えられる。

しかしなぜこのタイミングで威嚇などするのだろう、などと考えてるうちにランポスが倒れる。

「倒した……僕が、倒したんだ……は、ははは……」
自分の握り拳を見て再確認する。

しかし腑に落ちない点がある

何故ランポスは死に際に威嚇なぞしたのだろう。

彼等の習性をよく考える。

そう、あの「鳴き声」

アレは――

「しまつ――！！」

気付いたのが遅かった。

周囲には既に忌まわしき青き狩人が2頭も遠目からこちらを伺っていたのだ。

「アレは威嚇なんかじゃなくて仲間を呼ぶ救援信号のようなものだ

ったのか……！」

新米だから許されるという話ではない。この世界では死んでしまえばそこでデッドエンドなのだ。

勝つしかない。生き残るしかない。生き残った者勝ちなのだ。シンブルイズベスト。単純なこの世界の

掟。

ナイフを死骸から引き抜く。

勝てるのか……

いや、勝つしかない。と心に言い聞かせる。

「アイツらに鳴かれたら増援がきて確実にやられる……！」

ランポスどもを鳴かせずに倒すしか道はない

鳴かれたら二匹が四匹、四匹が八匹に とネズミ算のように増えていきこの力不足の新米ハンターの夢

はここで尽きるのだ。

だが、この青年には「鳴かせず殺す」なんていう技量や装備を持ち合わせてはいないのである。

手詰まり。チエックメイト。

「あんな奴にやられたのか」とランポスが青年を見て言っている様だ。

青年は身構えてはいるがどうしていいのかわからず身動きができずにいる。

突然雄叫びと共に二頭の波が爆ぜて押し寄せる

「クツ……！」

ナイフを握る。

死の臭い。

死の臭いがする。

近くにある先ほどのランポスの死体からする臭いなのだろうか。

はたまた死期が近いものにしか分からない「死」の臭いなのだろうか。

押し寄せる波。黒く光る爪。

回避不可能。生存不可能。敗北必至。

突然、ランポスの鳴き声「ではない」大きな高い音がした。

それと同時に吹き飛ぶ波の片割れの頭。

ギエ？と何が起こったか理解できないでいる生存者。

ピクピクと何が起こったか理解できず一生という物語を終えた退場者。

間髪いれずもう一度轟く音、そして吹き飛ぶ生存者「だった」者

イカルは音のしたほうを見る。

そこには

金髪碧眼の女がいた。

彼は目を離せずにいた。

まるで昔見て憧れていた「ハンター」に出会えた様な気がしたから

勝利と憧憬（後書き）

やっとソロからパーティーに話が変わります。
そんなズバつと変わるわけではないのですが一応ここで序章は終わります。

エールという少女（前書き）

辛くもピンチを乗り切ったイカル。
自分を助けてくれた少女と話をすることに

エールという少女

「前言撤回だ……」

とイカルは呟く

ついさっき助けってもらった女性と話をした。

こんなのは自分が憧れていたハンターの性格ではないと。

この言い方だと女性の性格が破滅的だったと思われそうなので言い直すが

別に性格が別段悪くないが（それでも勝気な部分が少々強いのは否めないが）イカルの理想のハンターというのは白馬の王子様みたいな性格、らしい

王子様だからってイカル青年にアッチの趣味があるわけでない。村でも好きな女の子がいたそうだし。

「アンタ見たとこハンター……」

モドキのようだけれど。ハンターなりたてなの？」

と、女性が言葉の途中でイカルの装備を見て言葉を付け足す。

「ハンターって言って良いのかわかんないけどハンター目指して此処に来たんだ。」

「なるほど、だから装備が一応あるのね。でもどうしてあんな所でランポスと戦ってたの？」

青年がなければの金でここにやってきて節約のためにちょっと街の

まだまだ物語は序章である

だが、イカルにとっては0から1へと足を踏み出すという大きな進展でもあった――

エールという少女（後書き）

前回で序章終わりといいましたが、ここで序章終わりにしたいと思います。

さて、次の話ではイカルが街に着いたところから始まります

ド田舎者観察日記（前書き）

タイトルの通り

街に着いたイカルを観察する話です。

物語的にはあまり進みません。幕間的なものだと思ってください。

ド田舎者観察日記

「ここが…街…」

イカルは街の活気。発展つぷりに驚きを隠せないでいた。身体を震わせているわ、辺りを見回すわで田舎者感が出まくってしまっているのだ。隣にいるエールのほうが恥ずかしかったりする。

「エール！すごいよ！人だ！人が沢山いるよ！うちの村の祭の時の何倍も人が集まっているよ！」
青年はどんどんテンションのボルテージが上がっていく。先に述べたので言うまでもないが、横にいる彼女の恥ずかしさのボルテージもどんどん上がっていた。

しかし青年にこの光景を見て興奮するな、なんてのは無理な話である。

何故なら目の前には憧れのハンターがごまんといっているのだから。イカルの前を通る者の武器を見ては、スゲー！やら、ウオー！などと先程から叫んでいる。

「イカル！そんなの後でいくらでも見るようになってそのうち飽きるんだから今見なくなつて良いでしょ！！」
と彼女に腕をつかまれ引きずられて歩くが青年の視線は前方ではなく四方八方に向けられていた。

そろそろ恥ずかしいぞイカル。

エールにつれられて酒場にやってきたイカル。

「酒場につれてきてどうすんの？仕事の後の一杯でもやりに来たの？」

と見当違いなことを言い出す田舎者

「アンタねえ…いい？ 基本クエストの受注はこの酒場で行うの！でもクエスト受注するにはここでハンター登録しなきゃいけないの！」

分かった！？ とズビシと指を青年に向ける。

先程辱め（もちろん青年に悪気はないのだが）を受けた仕返しとばかりにエールは捲し上げる。

「う、うん…」

と何故怒られてるのか分からない、といった表情で頷くイカル。

登録に行くわよ。と酒場のカウンターまで連れて行かれる。

「いらっしやい。」と相当な年齢であろう老人が酒を飲みながらカウンターに座っている。

その老人とエールが一頻話を終えた後老人がイカルに話しかける。

「お主がハンターになりたいという者じゃな？」

ド田舎者観察日記（後書き）

ついに目前に控えたハンター登録。

イカルはハンターになることは出来るのか！

まあそんな簡単にならせるわけありませんがw

試練（前書き）

ついにハンター登録をするイカル。
しかしハンターを目指すイカルに最後の試練が待ち受けていた。

試練

「お主がハンターになりたいという者じゃな？」

と、老人は片目だけ開けこちらを見て言う。

「お主がなろうとしてるものはとても過酷で、命をいつ失ってもおかしくないような職業じゃ。おぬしは本当にそれで構わんのかね？」

「はい」と言えばすぐ済む話なのに

言えない、動けない。

質問に「はい」と、答えたいがイカルは動けないでいる。

先のランポス戦のように怖いわけではないのだ。

雰囲気というのだろうか。質問と同時に老人のオーラがさっきの飲んだくれジジイなんかから打って変わって重く、鈍いものに変わったのだ。

イカルはその老人から放たれているオーラに押されて動けずに居た。どうじゃね？と挑発的に聞く老人。これはきつとハンターになる為の試験なのだろう。以下に自分の決意を、信念を老人のオーラに挫けず貫けるか。

それを老人は試そうとしているのだ。

答えたくても答えられない。

エールは黙って椅子に座ってビールを飲んでいる。

自分自身の力でやれ。ということなのだろう。

脂汗が流れる。拭く事も敵わない。

あまりの重圧に自分がここに何をしに来たのかも思い出せない。

アレ？ナンデココニイルンダツケ？

と、突然重圧が無くなる。

「だめじゃ、不合格。」

と、老人はそっぽを向きそう言い放った。

ハツとする。

飲まれた。老人のオーラに完全に飲まれてしまっていた。

しかし「ハンターになる」という強い「夢」が身体を自然に動かしていた。

「待ってください！！」

喰らいつく、ここで振り落とされるわけにはいかないのだ。

「ヌウ？」

ギロリとコチラを見る

二度目の重圧。

一度目より更に重く鈍い重圧。

言わなくては。

ここで言わなければダメなんだ……！

これは忘れてはいけない事なんだ……！

言おうと思えば思う程、強くなる重圧

あれ？

何を……？

何を言わなければいけないんだっけ……？

何を思い出したんだっけ……？

何を忘れちゃいけないんだっけ？

「忘れちゃいけない」ということを忘れてはいけないんだっけ？

その時、カウンターに座っている金髪の少女と目が合う

刹那、脳裏に浮かぶあの情景

絶体絶命の時にやってきたヒーロー。

昔、本で何度も見た憧れの職業。

そうだ、僕は「それ」を目指していたのだ。

それは――

「命なんて失くしたって構わない。僕は――」

少年は胸のうちにある夢を決意を持って口にする

「ハンターになりたいんです!!」

その夢を突き進むために――

試練（後書き）

ついに決意を言うことが出来たイカル。

この重圧は本文でも述べてる通り試験でもあります。
そして老人による洗礼でもありました。

彼の洗礼（悪く言えば重圧）は受けた人の余計な事を吹っ切らせ決意を固めさせるものがあると彼の洗礼を受けたハンター達は言います。

イメージとしてはヨハネの洗礼を受けたイエス的な感じですが、まあイエスがこんなに重圧やらなんやら厳しい事をされたかどうかはわかりませんがねw

田舎、勝気、そして細目（前書き）

ついにハンターになったイカル。彼はエールと共にパーティーを組もうとするが、近くには邪悪な影が……！
（べつにそんなに邪悪でもないです）

田舎、勝気、そして細目

彼らが去った後老人は呟く

「ちよつとキツめにやったんじゃがのう…」

言葉では悔しがっているように感じるが彼の表情は緩んでいた。少し楽しみなのだろう。

先の青年がどうなるのか。

「長生きをするもんじゃな…」

と、彼は手に持っていた酒のビンをグビツと飲み干した。

「いやー、本当に一時はどうなるかと思ったわよ。でも良かったわ！」

金髪の少女は手を差し出す。

「改めてよろしく。イカル！」

青年も手を握り返し

「よろしく！エール！」

と、全力の笑顔で応えた。

早速だけど、と少女は話し出す

「これからしばらく私とパーティーを組まない？」

少年にとってはこれが初めてのパーティーである。

助けてくれた、という点や

（一瞬だけだったか）カッコいいとも思ってしまった青年に断る理由なんて無いのである

「よ、よろしくおね、おねがいます。」

初めてのことで驚き舌が上手く回らない。

「なにいきなり他人行儀になっちゃってるのよ？ 緊張してんの？」

少年は否定するも彼女には通用せず笑われる。

また笑われた事に頬を膨らませたが彼は、この女ハンターはこういう人なんだ。という認識を持つこと

でおさめた。

ちゃんと言わなければ、と思い彼は改めて言い直そうとする。

「こちらこそ、よろし——」

ダンツと音がした。しかも目の前で。

音を出した張本人を見ると顔を真っ赤にしたハンター、と思わしきものがいた

「ネエちゃんよお！ そんなヒョロい男と遊んでないでオレとパーティー組もうぜ！ ガハハハハ！」

酔っ払いである。

そして酔っ払いの矛先はエールに向いていた。

酒臭い、そうとう泥酔しているのであろう。

エールの方をむいて話しているのにイカルにまで臭いが分かる。

男の正面にいるエールは眉に皺を寄せている。

酒の臭いがキツイのだろうか、それとも言い寄られてるのが嫌なんだろうか。

どちらにせよ嫌悪感を抱いてることは確かである。

「オレと楽しいことしようぜ！ ガッハハハハハ！」

彼女も断ってはいるがこの男はしつこかった。

周りで飲んでる連中も呆れた様な顔をして飲んでいる。

少年にはそれが許せなかった。見てるなら止めに入れば良いのに入ってこない。

そして目の前で嫌悪感を抱いてる少女を見逃すことが出来なかった。

「なあオッサン、この子も嫌がつてるんだからやめてやったらどうなんだ。」

静かに、しかし怒りを確かに込めて少年は言う

そしてやはりというか、ああ？とアルコールにまみれた生暖かい息で言い返してくる泥酔男。

「彼女が嫌がつてるんだ、やめた方がいいよ」

男はチツと舌打ちをしてこちらに矛先を変え、反抗してくる

「あ？てめえ何様だよ。オレはこの女の子と遊びに行こうとしてるだけなんだからよ！ ほら、行こう

ぜ！」

と、少女の腕を強引に引つ張り連れて行こうとする。

痛い！ と、痛みに顔をしかめた少女

それをイカルは許せなかった。

久しぶりに頭に来た。

イカルという青年は元来怒るということをあまりせずに生きてきた人間であった。

ちなみに最近頭にきたことは

あくびをしているときに苦虫が口の中に飛び込んできた時、だそうだ

イカルは男の腕をつかんだ

太い、伊達にハンターをやってるわけではないのだろう。喧嘩なんてしてしまったら負けるのは目に見

えている。

それでも彼は男だ。男であるなら逃げることの出来ない戦いがあるのも知っている。

青年は、やめろよ！ と叫ぶ。

それが癢に障ったのか泥酔した男は荒々しく

「なんなんだよてめえさつきから！ 一発やられねえと分かんねえみたいだな……！」

と腕を振り上げる。

少女がハツとした顔で何かを言ったが男には聞こえていなかった。

男はイカルに殴りかかろうと腕に力を入れる。

が、その時泥酔した男の腕が掴まれた。

つかんだ相手はイカルでも無くエールでもなかった。

彼の横には重厚ではあるが大きいというイメージは無い防具をつけた男が立っていた。

腕を掴みながら男は言う。

「オッサン、ダメだよー。ここは一仕事終えた人間が『ぷはー！』人生はこの為にあるのよねー！」なん

ていいながらお酒を楽しむところだ。そんな皆の癒しの場を壊しちゃあいけませんよ。」

フランクなしやべり方ではあるがどこか重たいものがある。

あの泥酔した男の腕が震えている。

まさか、力を入れているが動かすことが出来ないのではないのだろうか。

泥酔した男は一気に酔いが醒めたのか腕を振り解き、チツとあからさまに悪態をついてバツの悪そうに

どこかへ消えて行った。

助けてくれた男は泥酔した男に向かってバイバイと手をひらひらと振っていた。

「大変だったねえ君達。大丈夫かい？」と常に笑顔の男は少女たちに聞いてきた。

ええ、大丈夫です と少女たちは報告し感謝をした

「助けていただき本当にありがとうございました。貴方のお名前を教えてくださいませんか？」

とエールは礼儀正しく聞く。

「僕かい？ 僕はルークだ。ルーク・ディフィールドだ。」
よろしく、と笑顔で手を差し出す。

というかこの人は笑顔が尽きることが無い。

イカルは思う

（それにしてもこの人……目が小さいなあ……）

竜姫の守護を受ける者（前書き）

どうも。

ついにパーティー討伐に向かうことになりました。

彼らはいったいどうなるのでしょうか？

あと溜まってる分が尽き始めてきたので更新が遅くなってしまいました
すがご了承ください。申し訳ございません

竜姫の守護を受ける者

ルークという男は少年たちの横の椅子に腰を下ろした。彼はいくつかイカル達に質問をした後こう切り出した。

「僕も一緒に行つて良いかな？」

困惑するが断る理由も無いので二人は了承をした。

ルークはイャンクック辺りが良いのではないのか、と提案したがエールが意見を出した。

「イカルはまだランポスがやつと倒せるくらいなのにイャンクックなんて行つたら彼は瞬殺されてしまうわよ？」

心配御無用、とルークは指を少女の前に立てる。

「彼には後方にて見学をしてもらおうと思う。僕の分の報酬は彼にあげるよ。」

彼曰く少年たちの支援がしたいだけらしい。それならば、と少女も妥協をする。

「ならば決まりだ、明日の朝10時にここに集まろう。準備はしておくよ。」

と笑顔の男は言い残して去っていった。

エールも帰ろうとするが隣にいる少年が立とうとしない。疑問に思い少年に聞くと。

「泊まる所どうしよう……」

彼女は額に手をやってしまった。

「うわあ！　すごいよエール！　この部屋を使っているの？」
イカルはまたはしゃぐ。この少年ははしゃぎ疲れたりしないのだろうか？

「ええ、今日からここがアナタの部屋よ。」

この少年はハンターに部屋が支給されることを知らなかったらしく案内をしてやった。

部屋にある設備について説明をするが少年は四方八方を向いており聞いている様子は無い。

「まあ、とりあえず何か分からないことがあったら聞きなさいよ？
あと明日は遅刻しないように。もう遅いんだから早く寝なさいよ？」

じゃ、と部屋を出て行くエール。

しかし、少年はその後興奮していて結局寝不足になってしまったのは誰も知らない。

「よう、お嬢ちゃん達。ピッタリだな。」
予定時間に行くとルークは先に酒場にいた。

前日の時は武器を持っていなかったから分からなかったが武器を持った彼はとても頼もしく見える。
彼の装備は深い緑色をしていて、気品の中に荒々しさがある武器と

防具だった。

それは竜の姫の守護を受けている証でもあった。

「リオレイアシリーズ……！」

エールは驚いていた。まさかここまでハイレベルな人間が自分たちのパーティーに入ってくれたことがあり得ない事だったのだ。後ろにいた少年が少女に話しかける。

「なあ、エール？ あの防具と武器って凄いの？」

その言葉を聞くと同時に少女はキツと振り向いて少年に言い放つ。

「あれはリオレイアシリーズって言って雌火竜の防具よ！ シリーズを揃えているってことは彼、相当なドラゴンキラーよ……！」

さすがの少年でも凄さが分かった。

リオレイアは昔話にも出てきていたから。

それに比べてランポスシリーズの少女とハンターシリーズ（しかも腕と腰と脚のみ）の少年である。

レベルの差は火を見るより明らかであった

二人が息を呑んでいるとルークが声を掛ける。

「さて、行こうか！ お二方！」

彼に呼ばれイカル達はイャンクック討伐へ向かうのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2310j/>

モンスターハンター ~ New Face Diary ~

2010年10月10日06時15分発行